校長室だより～燦燦～ №２２５

伊集院静その２

2020.11.4

私は、ちょっと勇気を出して、若い女性の店員さんに「伊集院さんはよく来るんですか」と聞いてみた。「はい、半年に１回くらい」との答えが返ってきた。そして、さらに勇気を出して、会計の際に、また同じ店員さんに「伊集院さんは、どのへんに住んでいるんですか」と聞いてみた。すると、「この近くです」とのお答え。この店員さんはあまりわかってはいないなと感じたが、厨房のご主人にまで声をかけるほどの勇気はなかった。

私は、メニューを見てずっと気になっていたことがあった。それは「元春先生」である。メニューには６人ほどのお名前があったが、先生は「元春先生」だけだった。あとは「〇〇さん」だったのである。私は、「もしかして」と思い、「元春先生という方の苗字は何ですか」と聞いてみた。女性の店員さんは、わざわざ厨房に行き、店のご主人に聞いてくれた。

すると、シェフであるご主人が出てきてくれて、「なんだっけな。ハガだっけかな」私が、「アリガではないですか」と言うと、「そうそう何で知ってんの」とご主人の反応。「画家の有賀元春先生ではないですか」「そうだよ」「昔、福島にいたことはないですか」「そうだよ。よく知ってんな」「私、学生の時に、有賀先生のレストランでバイトしていたんです。ピントールの家という」「へえ、そうなの」「よくうちに来てくれるんだ」「ほら、こっちの部屋にいっぱい絵があるよ。全部もらったんだ。今は、この絵の所にいるよ。長野県の、何だっけな」すると、絵を見ていた妻が、「安曇野ですか」「そうそう」「うちに来ると、このテーブルでササアと絵を描いてくれるんだ。おれの顔は描きやすいんだと」「有賀先生の奥さんの絵もあるよ。あの花の絵。奥さんは苦竹（仙台市）の人なんだよ。有賀先生の絵のお弟子さんで、先生とは二回りくらい違うな。あの先生、変わってるから。もてるんだよな。おれはもてないけどな」「芸術家はもてますもんね」「そうだろ、やっぱり」

「伊集院静さんは、よく来られるんですか」「月に１回は来るよ。奥さんと女中さんと三人で来るな」「犬は連れてこないですか」「そう、何でも知ってるな」「作品を読んでいると、犬がよく出てきますから」「店に来ると、いつも本を置いていくんだ。おれは読んだことないけどな」「お宅はどのへんですか」「館四丁目だよ。バス停の前の角の大きな家だよ」「ああわかります」「いつも野菜炒めを頼むんだよ。もやしが好きなんだな」「そう思って野菜炒めを頼みました」「ほんとに何でも知ってるな」「いやいやメニューに伊集院さんおすすめとありましたから」「また来ます。おいしかったです。ありがとうございます」「おおまたな」

なぜ、この店に有名な方が来るのかがわかった。味もそうであるが、ご主人の人柄がいいのである。ただ、お店にご主人が陳建一と並んで写っている写真があったのが今一つではあったが。中華料理店というと、陳建一と一緒に写っている写真を飾れば、それでお店の保証になるようなところが気になる。福島にもそういったお店がある。

私は学生時代に様々なアルバイトをした。一番継続して長くバイトをしたのが、今はなくなってしまった「ピントールの家」という西欧風レストランである。福島駅西口エリアにあった。「ピントール」とは、スペイン語で画家という意味である。オーナーは、画家の有賀元春先生と女性であった。さすがにオーナーが有名な画家だけあって、ここには、いろいろなお客さんが来た。有名人も来た。本物の反社会的な組織の方々もいらっしゃった。私は多少緊張しながらコーヒーを出したことを覚えている。

（次号に続く）